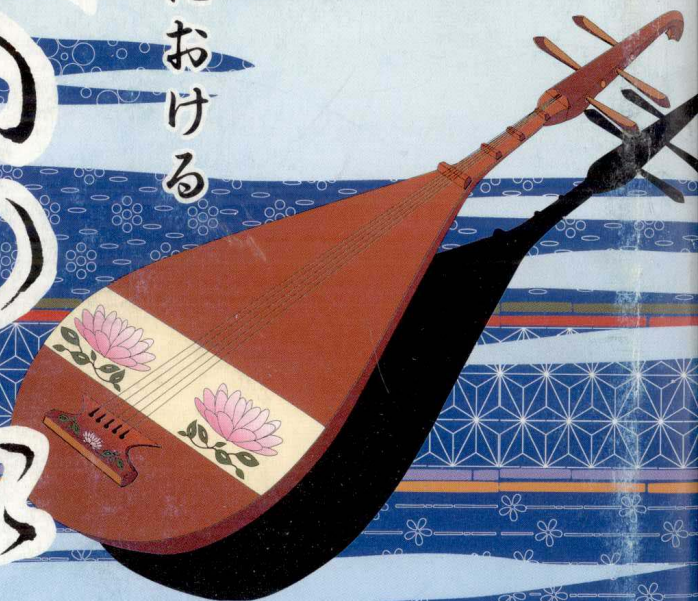


日本古典文学における

愛の力



K T C
中央出版

著者紹介

中本環（なかもと たまき）

昭和12年、広島県呉市生まれ。

大阪上宮中学、天王寺高校、広島大学及び大学院(文学部)了。

尾道短期大学、比治山女子短期大学を経て熊本大学に勤務。

現在、同教授。

良寛、一休、五山文学など、中世文学の研究及び国語教育の研究
文学雑誌『町塾』主宰。

日本古典文学における愛のかたち

発行 1994年10月31日 第2刷 2000年4月7日

著者 中本環

発行人 前田哲次

発行所 K T C 中央出版

〒460-0008 名古屋市中区栄1-22-16

TEL 052-203-0555

振替 00850-6-33318

印刷所 西川印刷株式会社

ISBN4-924814-45-8 C1095

© Tamaki Nakamoto 1994

* 落丁、乱丁本はお取り替えいたします。

日本古典文学における

愛刀のたより

小野小町から山頭火まで

中本 環

目次

第一章	人との	5
第二章	手まりつき	25
第三章	愛とうた	45
第四章	タブーと愛	69
第五章	愛のうず	89
第六章	愛の世界から旅へ	123
第七章	哀しい愛	107

第八章 愛・死にのぞんで

141

第九章 愛欲のあらし

161

第十章 愛と疑心

181

第十一章 愛と生きがい

197

第十二章 庶民の愛のすがた

213

第十三章 愛の果て

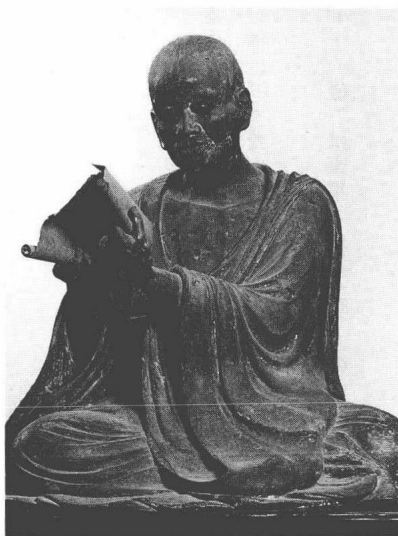
233

第一章 人との

西行、明恵、兼好、良寛……桜、月、空、鉢の子



西行像（東京国立博物館蔵）



伝平清盛像（六波羅密寺蔵）

一一九〇年（建久元年）二月十六日、西行（一一一八―一一九〇）は河内国の石川郡葛城山かつらぎの西麓ひろかの弘川寺で七十三歳の生涯を閉じた。先年彼は、

願はくば花の下もとにて春死なむその二月の望月もちづきのころ

と詠んでいたが、その願いどおり、釈迦入滅の二月の望月の日に、桜の花のもとに大往生をとげた。

釈迦入滅の日は二月十五日であるが、西行が願った望月とは満月の頃という意味であり、十六日はその中に入る。いずれにしろ、願いどおり、釈迦入滅の時に彼は逝いつたのだ。

旧暦二月の桜咲く頃、桜花のもとでの死であった。

この時の死について、慈鎮じちん（慈円。一二二五年没。七十一歳）は家集「拾玉集」の中で

文治六年二月十六日未ひつじの時、円位上人入滅臨終な
どまことにめでたく、存生にふるまひ思はれたりしに
更にたがはず、末の世に有難きよしなむ申し合ひけ
る。……

願はくは花のもとにて春死なむ其の如月の望月の

文治六年二月十六日未（午後二時―四時）の時に、円位（西行）上人は入滅され臨終を迎えられたことなどまことにめでたく、生存中に用意し希望されたとおりになった。仏法衰えた末世にあつてまれなすばらしいことだと話し合った。……願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ、と生前詠んでいて、そのとおりになったこ

頃、とよみ置きて、それに違はぬ事を世にもあはれがりけり。

とを世間の人々も感動し合った。

と記している。

藤原俊成（一二〇四年没、九十一歳）は家集「長秋詠藻」（下）のなかで

円位ひじり……年のはての頃京にのぼりてと申しし程に二月十六日なむかくれ待りける。彼かの上人先年にさくらの歌多くよみけるに、

同じくは花のもとにて春死なむその二月の望月の

頃

かくよみたりしををかしく見給ひし。ことに遂に二月十六日望の日をはり遂げけること、あはれに有難く覚えて書きつけける。

願ひおきし花の本にて終りけり蓮はちの上もたがはざらなむ。

と記している。

（下）のなかで

円位（西行）上人は……昨年末、上京して私に会いたいと言っておられたが、今年二月一六日に死去された。かの西行上人はこれまで桜の歌を多く詠んでおられたので、

同じくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ

と私も詠んだが、それを上人はおもしろがられた。特に二月十六日という満月の日に人生の終焉をなすとげられたことに、私は感動して次の歌を書き付けた。

願ひおきし花の本にて終りけり蓮の上もたがはざらなむ

西行上人は願つていたとおり花のもとで人生を終えられた。あの世でも願いどおり、極楽の蓮の上にお生まれになるようにと、俊成は祈りの歌を詠んでいるわけである。

慈鎮にしろ俊成にしろ、西行の終焉しゆうえんに感動したのは、生前の願いのとおりに、そして安らかに死を迎えたからだ。

ここで思い出されるのが、平清盛（一一八一—一一八二）の死である。清盛は西行と同じ年で鳥羽院の北面に仕え、西行（俗名は佐藤義清のりきよ）と同勤同僚であつた。彼らは地方に経済基盤を持つ同じ武門の出でもあつて、極めて似通つた経歴、環境の中にあつたのである。が、佐藤義清は二十三歳の時出家し西行と号して漂泊の僧となり、一方平清盛は政界に進出して、保元、平治の乱によつて対立勢力を一掃し、後には人臣最高の太政大臣にまでなつた。

西行は地位、名誉、権力、富などを捨てて無一物の中に人生を送り、清盛は逆に名誉、権力、富などすべてを得て、最高の榮譽を手につかんだ。

さて、人生の決算の死の時を迎えて、西行は先に見たとおり、釈迦の命日に愛する桜の花のもとで永い眠りについた。一方清盛は、高熱にうかされ悶絶躰地もんぜつびやくち（苦悶し倒れる）して「あつち死に」をする。妻の二位の尼は清盛が火の車に乗せられ無間地獄むげんに落とされる夢を見る。清盛は苦しい息のしたで、頼朝の首をはねて自分の墓の前につけよと、遺恨の言葉を残して、死んでいく。

平家物語に記されたこの話は、広く世間に伝わり広がつていったにちがいない。この世は仮りの世と見、死後をこそ永遠の世として重視した当時の人々にとつて、清盛の死は、地獄への門と意識されたろう。

一方西行は、安らかに極楽往生したと、感動をもつて見送られたのだ。

富、地位、権力、名誉などすべてを得た人物と、それらを捨て去って漂泊、風雅のうちに生きた人物と、この対照の中で、何が人間の幸せかという根源の問題を、当時の人々は投げかけられたであろう。

*「あつち死」：身もだえして跳ねまわって死ぬこと。

二

西行は桜の詩人と称せられ、数多くの桜の歌を詠んでいる。が、それらの中にあつて、「願はくば花のもとにて春死なむその二月の望月のころ」という歌は、桜への思いの深さが、最も色濃くでているといつていいだろう。

死の時にあたって願ったことが、釈迦の命日と重なることと、桜の下で眠ることであるのであつて、桜への慕情の深さ、愛の深さがわかるのである。桜は、西行を抱擁し、安らかにさせてくれる、たとえば仏のようなものだ。あるいは母のようなものだといつてもよい。

西行と同時代の人物に薩摩守平忠度（一一四四―一一八四）という男がいる。彼の行跡は「平家物語」によつて知られるのだが、彼の死も桜と仏とに深くかかわっている。以下この点について、私は次のように発表（講演記録）したことがある。

平家物語を読みますと、いろいろな感動的な場面に出会います。俊寛の足摺りのこと、維盛の入水、

あるいは義仲の最後とか、あるいは壇の浦の戦いなど数えあげればきりがありません。しかしながらそうした中でも、私には奇妙な印象に残るのは例の一の谷の合戦の薩摩守忠度の最後の場面でございます。

これは皆様御存知のところでございますが、一度都を追われて太宰府まで下った平家軍が、やがて勢力を盛り返して、屋島に行宮あたうをそなえて、播磨以西を制して一の谷に軍を敷き、そして源氏の軍勢に対峙する。ところが一方で源氏の義経は、木曾義仲を討ち滅ぼして、そしてやがて寿永三年二月に一の谷へと寄せてきて、そして奇襲でもって平家を追い落とす。その時戦死した武将たちというのは十数名おりますけれども、その中の忠度という人物は、やはり特異な死に方をしている。つまり簞かきに、矢を入れるあの簞に一首の歌を結い付けていた。その簞の歌というのは、たまたま付けていたということではなくて、勿論平家一門は都落ち以来、忠度にもまた日々が戦いの日でありますし、死に臨んでの日々であるわけでございましょう。ましてや矢を負う簞に結い付けた歌でございします。戦具を入れる簞にその歌を結い付けておるわけでございます。死を覚悟の上の、深く心をこめた歌といつていい。忠度の平生の覚悟というものを、その中にみてとることは、誤りではないと思うのであります。「行き暮れて木の下かげを宿とせば花やこよひのあるじならまし」日が暮れて宿るべきところもない。そこで桜の花の木の下かげに少し、桜に挨拶をしてそして泊めてもらう。そうすると今宵の宿の主人は花であろう。花のあるじでございします。贅沢さと申しますか、心の余裕と申しますか、不思議な気がする訳でございします。忠度は、攻めてきました武蔵の国の住人、岡辺の六野太忠純と組んずはぐれつして、忠度は馬の上でそれを突きさすけれども、うまく突きそこねて落ちてしまう。そこでまた忠度、首をはねようとするところへ小童がやってきて、その主人である六野太のために奮戦して腕を切り落とす。そのところを読ん

で見ますと

六野太が童、おくれればせに馳^はせきて、急ぎ馬より飛んで下り、討ち刀を抜いて、薩摩守の右の腕を臂^{ひじ}の本よりふつと打ち落とす。薩摩守今はかうと思はれけん。「しばし退^のけ。最後の十念唱へん」とて、六野太をつかうで、弓長^{ゆんだけ}ばかりぞ投げのけらる。其の後西に向かひ、「光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨^{なんざうしゅじやくせつしゆふしよ}」と宣^{のたま}ひもはてねば、六野太後より薩摩守の頸^{くび}を討つ。よい大將軍討ち奉^{ほう}つたりとは思へども、名をば誰とも知らざりけるが、簾に結び付けられたる文を取って見ければ、旅宿^{りしゆく}の花といふ題にて、歌をぞ一首詠まれたる。

行き暮れて木の下かけを宿とせば花やこよひのあるじならまし

忠度

と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。

という、例のところでございます。ここで、この歌の前に、西行と同じようなことになってまいりますが、忠度は「光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨」と拝むわけでございます。つまり仏に最後の自分の安住の地を求めて、よろしくお願いします、何もかもお任せしますと、念仏というものはそういう意味かどうか判りませんが、お任せしますということであの世へ行く。しかしながら一方で、「花のもにて春死なん」と同じような気持ちで、「行き暮れて木の下かけを宿とせば花やこよひのあるじならまし」とこういうふうに詠んでいるのでございます。次の解釈は私の勝手な解釈でございます。というよりも幻のように浮かぶのでございますが……。人生の道に行き暮れて、戦のこの世に生まれて、そし

て今、木の下かげ、仏のかげにねむれば、仏は今宵宿のあるじのように私をもてなして下さるであろう。そういつてもおかしくない。花を仏にかえても、ひとつもおかしくないような場面であり、歌であると思えるのでございます。（『国語研究紀要』第八号、熊本県高等学校教育研究会国語部会）

引用がなくなつたが、薩摩守忠度は死の最後において、桜の木の下で花にもてなされて眠るよと、辞世のメッセージを残したわけである。

念仏を唱える衆生は誰をも極楽浄土へと摂取して捨てず（念仏衆生摂取不捨）、という弥陀の誓いにかせてそのふところに抱かれ、そして、人生行程が終わつて日が暮れる今、桜の下で花にもてなしをうけつつ眠る、というのである。

桜が薩摩守忠度を抱擁し安らかにさせてくれることは、西行の場合と同じである。仏のようであり、母のようである。

三

西行よりやや後の明恵上人（一一七三―一二三三）は、月の歌人ともよばれるが、彼の月との結びつきは、人間同士のような感じがする。月への思いやりが、とても深いのだ。

川端康成はノーベル賞受賞講演の『美しい日本の私』のなかで、その冒頭部分で明恵にふれている。冒

頭から次に紹介する。

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷^{すず}しかりけり

道元禪師（一二〇〇年～五三年）の「本来ノ面目」と題するこの歌と、

雲を出でて我にとみなふ冬の月

風や身にしむ雪や冷たき

明恵上人（一一七三年～一二三二年）のこの歌とを、私は揮毫をもとめられた折りに書くことがあります。

明恵のこの歌には、歌物語と言へるほどの、長く詳しい詞書^{ことばが}きがあつて、歌のこころを明らかにしてゐます。

元仁元年（一二二四年）十二月十二日の夜、天くもり月くらきに花宮殿^{くわきゅうでん}に入りて坐禪す。やうやく中夜にいたりて、出観^{しゅくくわん}の後、峰の房より下房へ帰る時、月雲間^{ぐもま}より出でて、光り雪にかがやく。狼の谷に吼^ほゆるも、月を友として、いと恐ろしからず。下房に入りて後、また立ち出でたれば、月また曇りにけ

り。かくしつゝ後夜ごやの鐘の音聞こゆれば、また峰の房へのぼるに、月もまた雲より出でて道を送る。峰にいたりて禪堂に入らんとする時、月また雲を追ひ来て、向ふの峰にかくれんとするよそほひ、入しれず月の我にとみなふかと見ゆれば、

この歌。それにつづけて、

山の端はに傾くを見おきて、峰の禪堂にいたる時、

山の端にわれも入りなむ月も入れ

夜な夜なごとにまた友とせむ

明恵は禪堂に夜通しこもつてゐたか、あるひは夜明け前にまた禪堂に入ったかして、

禪観ぜんくわんのひまに眼まなこを開けば、有明ありあけけの月の光、窓の前にさしたり。我身は暗きところにて見やりたれば、澄める心、月の光に紛まぎるる心地すれば、

隈くまもなく澄める心の輝けば

我が光とや月思ふらむ

西行を桜の詩人といふことがあるのに対して、明恵を「月の歌人」と呼ぶ人もあるほどで、

あかあかやあかあかあかあかやあかあかや

あかやあかあかあかあかあかや月

と、ただ感動の声をそのまま連ねた歌があつたりしますが、夜半から暁までの「冬の月」の三首にしても、「歌を詠むとも実に歌とも思はず」（西行の言）の趣きで、素直、純真、月に話しかける言葉そのまゝの三十一文字で、いはゆる「月を友とする」よりも月に親しく、月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一しています。暁前の暗い禅堂に座つて思索する僧の「澄める心」の光りを、有明けの月は月自身の光りと思ふだらうといふ風であります。

「我にとりなふ冬の月」の歌も、長い詞書きに明らかなやうに、明恵が山の禅堂に入つて、宗教、哲学の思索をする心と、月が微妙に相応じ相交はるのを歌つてゐるのですが、私がこれを借りて揮毫しますのは、まことに心やさしい、思ひやりの歌とも受け取れるからであります。雲に入つたり雲を出たりして、禅堂に行き帰する私の足もとを明るくしてくれ、狼の吼え声もこはいと感ぜさせないでくれる「冬の月」よ、風が身にしみないか、雪が冷たくないか。私はこれを自然、そして人間にたいする、あたたかく、深い、こまやかな思ひやりの歌として、しみじみやさしい日本人の心の歌として、人に書いてあげてゐます。（川端康成『美しい日本の私』講談社）